

会報 峠 とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第13号
2013.03

編集・発行
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）



友の会を思う

友の会理事 田所 仁

私が河井継之助記念館をたずねますと、職員の方が温かく出迎えてくれます。何も用のないときでも、いつの間にか、河井継之助記念館をたずねてしまいます。

河井継之助は幕末の長岡藩財政改革や北越戊辰戦争の戦争指導をした怖い人のように、世間では喧伝されていますが、私は案外、懐の深い温かな人ではなかったかと思っています。友の会が支援して作成した銅像は、顔がやさしく、希望にみちたお姿なので、私は大好きです。

河井継之助記念館ができて六年。友の会が形成された五年。河井継之助の人間性については、まだまだ世間に認知されているとは思えません。むしろ、町を焼いた極悪人などという誤解もあるようです。

河井継之助記念館ができて、私

はもと北越銀行頭取の高田正一さんにおねがいして、終焉の地見から松樹二本を移植してもらいました。今はすくすくと育って、蒼龍の名をほしいままにしていますが、なぜか庭園に行きますと、心が落ち着きます。河井継之助の世を革める心が、その松樹にのり移っているのではないかと思うことがあります。

友の会が毎秋、恒例にしている八町沖の渡河ウォークがありまが、秋の陽を浴びながら、約四、五キロの戊辰戦争史跡の八町沖のなかを歩きます。今は美田に生まれ変わっていますが、戦争当時、河井継之助総督をはじめとする六百九十名の戦士が参加する奇襲戦でした。

昨年は約百名の参加者でした。ときどき勝鬨の大声をあげなが



約4～5キロの戊辰戦争史跡の八町沖のなかを歩く



ら、広い田圃のなかを歩きます。さわやかな秋風を背にうけて、真実、長岡藩兵の一人になったような気分になります。今年も開催する予定にしていますから、皆様も機会をとらえて参加してください。なんだかんだと友の会は行事があり、河井継之助を思う友の会に入つてよかったと思えました。

発起人の一人として、友の会が末長く発展していただくことを祈念しています。

田所 仁（たどころひと）プロフィール
昭和5年（1930）長岡生まれ長岡育ち。
河井継之助記念館友の会の理事やアオーレ長岡にてながおかまちの駅長として活躍中。

峠抄 ● とうげしょう ⑫

雪国の人々は、今日の天気を聞くのが挨拶代わりという。「今年の雪はそうでもない」と言われ、正直どう反応すればいいのかわからない。現代ですら首都圏では、積雪で交通網が麻痺するというのに、江戸時代の越後では、どう防寒し、寒さをしのいでいたのだろう。

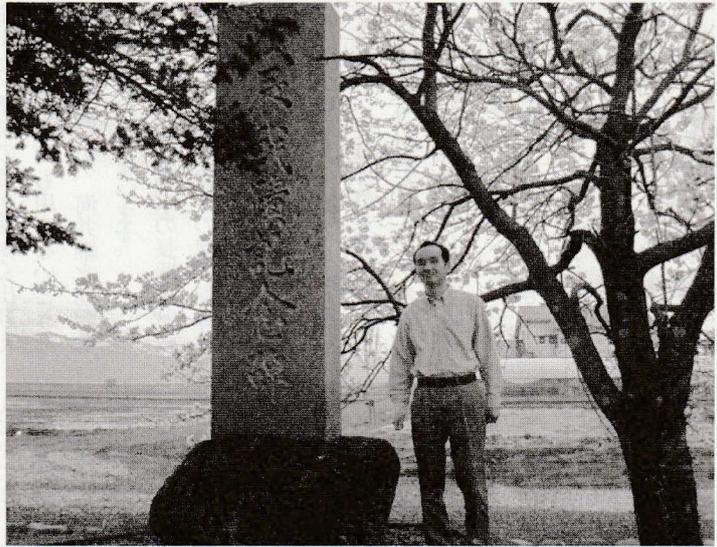
あたたかい国の生まれとしては、雪が積もるほど降ることが非日常である。一度でいいから雪だるまが作れるほど降ってほしい、と儂い夢を抱く。しかし実際、積もる雪が日常な土地に越してみれば甘い夢は抱けない。音もなく降り積る窓の外を見ると、明日は雪かきか、と思うがせいぜいである。

一方で雨といえば「憂鬱なもの」と考えていた。しかし雪国の雨とは、間違いない雪を溶かし、翌日の雪おろしを楽にする「恵みの雨」である。雪国の人々は、四季がはっきりしている分、春待ちの希望が強いという。「蒼龍窟」にて冬ごもりをする蒼き龍も、青空を求めて江戸へ、南へ旅立ったのだろうか。

（高柳）

駆け抜けた蒼龍・中村勘三郎さんの思い出

小名 泰裕



戊辰戦蹟記念碑の前の中村泰裕氏

話がちあがりしました。そして、立候補したところ採用されたのです。

長と鼎談ていだんされたのです。場所は、ホテルニューオオタニ・N Cホールでした。稲川館長が、勘三郎さんにドラマのことを尋ねながら鼎談がはじまりました。そこで私は、勘三郎さんを偲んで、勘三郎さんが話された部分をメモから文章にまとめてみました。

しかし、今だから言えるのですが、二時間半では、正直、河井継之助を描きれなかったのも事実です。時間的に無理でした。特に「雪」のシーンがなく残念です。やはり、河井継之助のドラマは一年がかりでないといけません。雪は、継之助を演じるにあたって非常に重要です。

また、ドラマでは、中村獅童さんに岩村精一郎役をやっていたにすぎませんでした。適役でした。土佐藩軍監・岩村は、小千谷談判当時二十四歳であり、獅童さんが演じる岩村のような若輩に、河井が蹴散らされ手をつけて謝っている継之助を演じることにより、視聴者に北越戊辰戦争がなぜ起こったかを考えてもらいたかったのです。

新しくてきた長岡の河井継之助記念館には、継之助が小千谷談判に持参した嘆願書があります。ぜひ、読んで欲しいとおもいます。嘆願書には「内戦などしてかしては日本国の恥になる。そうならないように戦争を回避すべきではないか」と書いてあります。しかし一方、河井継之助は日和見も嫌っていません。日和見している他藩に我慢ができなかったのだと思います。内戦を止めさせようと言う藩がな

いことにも憤慨していました。河井は、「越後長岡藩は他藩の真似をしない」と考えていたのだと思います。

台詞せりふについて脚本家にお願した部分があります。瀕死の重傷で、只見まで逃げて無念であったであろう河井継之助を考えたとき、私の想いを台詞にいれてもらいました。ドラマの最後の「不死鳥のごとく」の台詞です。中越大地震による災害の復興の願いも込めて、私がドラマを作った意思を表したかったのです。この台詞を火野正平さん演じる小山良運さんに言ってもらいました。また、長岡藩の立場を西軍に受け入れられず、思案のあげく河井継之助がなぜ戦ったかの気持ちとあわすためにも「五分の虫にも三分の魂」の台詞も入れてもらったのです。

話は変わりますが、私には山本五十六の子孫の知り合いがいます。その知り合いに、山本五十六の家族への手紙を見せてもらったことがあります。「日本は負ける」と書いてあったのです。当時、連合艦隊司令長官の手紙と言うことで国の検閲を免れたでしょうが、その手紙には「今は日本は勝っているが、やがて日本国中が火の海になる。そんなに浮かれている場合ではない」と書いてありました。山本五十六は、結果がわかっていたのです。で

すから非常に辛かったと思います。その山本五十六は河井継之助を慕っていました。二人とも、先が見えていたにもかかわらず、結果として同じような人生をおくったことは残念です。(談終り)

帰りの新幹線車内のこと

私(小名)はシンポジウムの帰りの上越新幹線で「中村勘三郎さんと一緒に列車だといいなあ」と思っていたところ夢が実現しました。グリーン車には、勘三郎さんと付き人の方が座っていたのです。他に乗客がいなかったことも幸運でした。

グリーン車で、サインと写真をお願いしたところ、付き人、数名に取り囲まれてしまったのですが、勘三郎さんが「いいよいよ、他にお客さんもないから」と言っていて、河井継之助の書(複製)に「十八代中村勘三郎」と署名してくださったのです。また、写真にも一緒に写っていただきました。私が「ありがとうございます」と言っていて立ち去るとき、勘三郎さんが笑顔で手を振ってくれたのです。その光景が今でも鮮明に目に焼きついています。

小名泰裕のおぼろげなプロフィール

昭和30年(1955)年大阪生まれ、大学を卒業後、関東へ。現在は、自動車メーカーの本田技研(株)に勤務。長岡地方でのことも印象深い思い出は、小千谷の料亭「東忠」にて中越大地震に遭遇したことです。

二〇二二年十二月五日早朝、歌舞伎俳優の中村勘三郎さんが急性呼吸窮迫症候群のため永眠されました。五十七歳という若さでした。

勘三郎さんは、二〇〇五年の年末大型時代劇『駆け抜けた蒼龍・河井継之助』で、自らドラマの企画、主人公の河井継之助を演じるなど、大の河井継之助ファンでした。

その勘三郎さんが、ドラマ放映の翌年十二月二十七日に長岡で、森市長、河井継之助記念館・稲川館

中村勘三郎さん談

私が福沢諭吉役のドラマに出演したとき、坂本龍馬役は武田鉄矢さんでした。その武田さんから、司馬遼太郎さんの小説「峠」を紹介していただいたのです。読んでみたところ非常に感銘を受けました。幕末の佐幕にこんな凄ひとがいたのかと、びっくりしたのです。私も五十歳近くになり、できれば、「河井継之助役」を演じたいと思っています。その矢先、ドラマ化の

話もちあがりしました。そして、立候補したところ採用されたのです。しかし、今だから言えるのですが、二時間半では、正直、河井継之助を描きれなかったのも事実です。時間的に無理でした。特に「雪」のシーンがなく残念です。やはり、河井継之助のドラマは一年がかりでないといけません。雪は、継之助を演じるにあたって非常に重要です。

また、ドラマでは、中村獅童さんに岩村精一郎役をやっていたにすぎませんでした。適役でした。土佐藩軍監・岩村は、小千谷談判当時二十四歳であり、獅童さんが演じる岩村のような若輩に、河井が蹴散らされ手をつけて謝っている継之助を演じることにより、視聴者に北越戊辰戦争がなぜ起こったかを考えてもらいたかったのです。

新しくてきた長岡の河井継之助記念館には、継之助が小千谷談判に持参した嘆願書があります。ぜひ、読んで欲しいとおもいます。嘆願書には「内戦などしてかしては日本国の恥になる。そうならないように戦争を回避すべきではないか」と書いてあります。しかし一方、河井継之助は日和見も嫌っていません。日和見している他藩に我慢ができなかったのだだと思います。内戦を止めさせようと言う藩がな

『峠』の越後長岡を歩く ⑩ 番外編

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている越後長岡の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は番外編として小千谷の榎峠・朝日山を歩いてみました。

●「峠」下巻 新潮文庫3冊1ページより

時山は、山県に戦況を説明した。

——榎峠の敵は、とても固い。

(中略)

「わしは思うが」

と、山県は言った。「いま視察してきたところでは、榎峠よりもむしろ朝日山の方が重要である」という。朝日山をまず奪らなければ榎峠は圧迫できないと山県はいうのである。

慶応四年五月二日、慈眼寺にていわゆる小千谷会談が決裂、西軍と長岡藩の戦争が始まります。翌日長岡藩が開戦を決定した時には、既に西軍は、尾張・上田藩兵を榎峠に布陣させていました。長岡藩は会津・桑名藩等の同盟軍と連携し、一旦は明け渡していた榎峠の奪取に動きまゝ。

二手に分かれた同盟軍は、妙見方面から攻めかけたものの果たせず、金倉山から榎峠に向かった一隊が、谷を隔てた朝日山頂を攻略し、榎峠奪取に成功しました。濃霧の中、西軍は朝日山攻略を試み突撃しますが、山頂付近で指揮官時山直八の狙撃・死亡を招き総崩

れとなります。過酷な最前線ゆえ、西軍は時山の遺体を戦場に放置し退却したといわれています。

西軍参謀山県有朋は城南の激戦を見て「あだ守る砦のかがり影ふけて夏も身にしむ越の山風」と詠んでいます。両軍の攻防は、西軍が大島から信濃川を渡り、長岡城が落城されたことで一旦終了しますが、長岡城奪還戦へと激烈を極めた戦闘となっていました。



現在の「榎峠」は、石坂山の西稜線上、長岡・小千谷の藩境近くの標高三百二十メートルの峠です。長岡城下から南へ約十二キ



朝日山殉難者墓碑入口 榎峠古戦場碑

口、三国街道の峠道でした。峠の西側は、直接信濃川に落ち込み、川の対岸に座す『峠』の文学碑から見ると、ここが戦略的重要拠点だと理解できます。平成十六年十月の新潟県中越地震の際は、榎峠トンネル周辺は崩落現場となりましたが、現在はきれいに復旧しています。

もう一つの舞台「朝日山古戦場」は、小千谷市街から北東四キロに位置する朝日山山頂周辺に存在します。山頂へは国道付近の浦柄地区からハイキングコースとなっており、徒歩で約四十分ほどです。登山口近くの浦柄神社には昭和の半ば、小栗山村の人々が建立した長岡・会津藩の戊辰戦死者の

墓が、二十二基あります。会津白虎隊藩士新国英之助(十六歳)の墓は、父が二十数年遺体を探し建立したといわれています。現在二つの場所は、夏は「夏草どもが夢のあと」となり、雪で覆われてしまふ冬は、手軽には足を運びにくい場所となっています。(高柳 参考「長岡歴史事典」長岡市)

遠方からの客人

●インタビュー⑩ 中越地震の支援活動が縁で交流が始まって



森忠延さん(52歳)佳枝さん

平成25年2月24日

ていると感じ、支援のひとつとして小千谷の子どもたちを神戸に招きホームステイなどを通して交流をしました」と話されました。それが縁で今も小千谷の方とお付き合いが続ぎ、今回は風船一揆を見に来られたのです。

●継之助に関して

「私は幕末が好きというより人物が好きです。継之助のことは司馬遼太郎の『峠』で知り、山田方谷関係の本も読んで岡山の方谷庵にも行きました。継之助の印象としては梓の中には収まらないスケールの大きな人、身分に関係なく民のことを考え行動していた人だと思えます。また、精神的強さや辛抱強さを養ったのは武士の教育を受けたからというだけでなく、雪国の風土が育んだのかも知れない。この雪を見てるとそんなふうに思えてなりません」

●二つの地震
阪神淡路大震災を経験した森さんは、震災十年復興事業で中越地震を被った小千谷市の小学生と神戸の子どもの交流をしました。「神戸の五・六年生位の子どもたちは震災の時はまだ幼く地震の記憶はありませんが復興は知っています。しかし、中越地震で被災した子どもたちは地震の怖さを体験していますが復興に対し不安を抱え

お話が終わったあと、奥様とふたり継之助ゆかりの庭をじっと眺めておられました。(インタビュー/西川)

ガトリング機関砲の謎

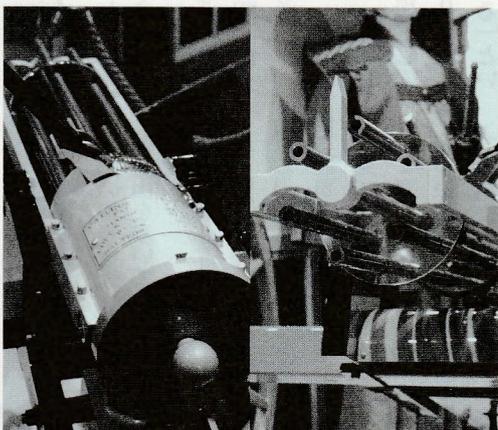
別稿
特寄

中村 隆



中村隆氏

北越戊辰戦争の激戦地長岡は、全く往年の姿をとどめていない。江戸時代の長岡の様子は部分的には絵画等で見ることができ、全体となると判らないと云ってもよいのではないだろうか。ドナルド・キーン「明治天皇」には明治天皇の全国巡業の途中で長岡においてになった時の様子がえがかれているが、多分あれが一番雰囲気を示すものではないだろうか。戊辰戦争終結からかなりの時間が経ってきてしかも途中に、大東亜戦争による空襲もあり、それやこれやでどんどん変貌しつつあるように思う。



ガトリング機関砲 (河井継之助記念館)

さてその戊辰戦争であるが、司馬遼太郎の「峠」の影響が何と云っても強い、司馬史観と俗に言うが、彼の考

えになじまないものは除かれているようである。河井継之助にしてみれば、河井継之助に思われる。明治に入ってから河井家の墓を荒らした人々がいたことはみんな知っていることだ。彼個人の思いがみなを戦争に引きずって行ったのか、それとも少なくとも侍はどう考えていたのか、住民はなにもできなかったのか、現在の、過去とは違うにしても今現在の評価はあつてよいように思う。

その「峠」で大きく取り上げられているのが、長岡藩の近代兵器による武装である。薩長をしのぐ武装をして一藩中立を図るだじな要である。その象徴がガトリング機関砲だと思ふ。まさに北越戊辰戦争

従者の大崎彦助に与えた扇面がある。そこには「義の存する所 弧危を冒すも 必ず、心の宜しき所を吐き 百切を経て回らず」と記されている。

大崎彦助が領内栃尾組の来伝村から、長岡藩士佐野与惣左衛門(百石)の邸に奉公し、義弟の継之助の人柄を知り、私淑を懇望した際に記したと伝説があるしるものである。

河井継之助はどういう人物?

連載

その⑪ 人を育てる

旅立つたとき追従しようと出奔して江戸に向う。遊学先をたずねて「緒に学ぶ」ことを懇望したが継之助の説得にあつて、やむなく帰郷している。流石の継之助も彦助の情熱には手を焼いた。大崎彦助は庄屋の長男として、将来、村役人がどうあるべきかを奉公先で学ぼうとしていたという。それには農村がみずから改革をしなければならぬという信念があつた。

また、別の話だが、明治維新後、日本の医療技術は抜群の進歩を遂げたが、その陰で済世学舎の役割を知っている人は少ないだろう。済世学舎は東京にできた医学校で、多くの民間の医師を輩出させた教育機関である。野口英世も西岡弥生も済世学舎の出身であるといえ、わかりがはいらう。

(稲川)

の象徴ではないだろうか。ところが2丁あつたはずのものが、1つも残っていない。敗戦当時は見たくもない気分はわかる。しかしどこかにあるのではないだろうか。レプリカを作るくらい長岡の人は思い入れがあるはずだ。そこで提案ですが、

ガトリング機関砲探しに賞金を募集して懸けるか、プロジェクトチームを作つたらどうだろうか。弾丸でも爆薬帯でも銃架でもその残骸でもなにか欲しいように思いますが、いかがでしょうか。

長岡城奪還戦の際には、大崎彦助を新政府軍の牢から救い出すことを継之助が指示している。継之助にとつて彦助がこれからの長岡藩政改革の一員で生きつづけて欲しいと念願したのであろう。

中村 隆(なかもらたかし)プロフィール

昭和24年生まれ長岡出身。現在吉乃川株式会社専務取締役。NPO法人醸造の町撰酒屋町おこしの会会長

「塵壺」を読む

11 連載

有馬街道は、大阪・神戸から有馬温泉に至る街道の名称である。

「有馬街道」と呼ばれたこの道は、歴史的に三つのルートに分かれるが、その中でも継之助が通ったと思われるのは、別名「湯山街道」と呼ばれた道である。湯山は、有馬温泉の別名で「神崎―伊丹―小浜―生瀬―有馬温泉」という道筋をたどる。有馬温泉は、畿内随一の温泉といわれ、六甲山地北側中腹の盆地に位置し、避暑地としても名高い。「家数四五百」と記されているように、当時の写真を見ると、盆地の全景とそこに密集する家屋の様子がわかる。継之助は、温泉好きだったらしい。十一日の昼前に有馬温泉に到着し「五度入湯」、奥坊にて一泊した。さらに「朝、二度入湯。七の数を以て、一回に当てるなり」とある。昔から「湯治は七日に一回り、三回りを要す」という考え方があ

「これより後は松山にて、只、覚あるを記すのみ」と書かれていることである。つまり七月十一日以降の日記は、現地で書いたのではなく、松山に戻ってからまとめ書きをしたのだという。継之助自身よほど記憶がよかつたのか、もしくはこの日記「塵壺」以外に草稿メモがあつたのではないだろうか。兵庫に入ると、継之助の興味は、平家物語にまつわる史跡と、松樹の見事さに向くこととなる。七月十二日、松王の人身御供で埋め立てた築島を見ながら、平清盛の墓を詣でている。須磨寺の平敦盛の墓は見学できなかつたが、源義経の轡越（わたりこえ）で有名な一ノ谷の古戦場を通り、舞子浜の松林の風景に感嘆した。

明石よりは、平忠度の墓と、柿本人麻呂の社のある丘に登った。ちょうど淡路島全体を見渡す事が出来たらしく、「淡州の大なる二八案之外也」と想像より大きかつた島に驚いている。彼は旅行中、ひらけた高い場所から、訪れた土地を、細部まで眺めたおす記述が散見する。望遠鏡を所持していたからとか、単に美しい風景を見て満足したいから、という側面もある

が、継之助の土地の地理・産業・人の様子を総合的に捉えたいという意欲と観察眼のあらわれにも思える。明石よりは浜辺を歩き、ここからは松の見物のオンパレードだ。はじめに加古川の住吉社の「手枕の松」を、次に菅原道真を祀る浜宮之社の「浜の松」を見物した。さらに付近の尾上社の「尾上之松」と、朝鮮から渡来した鐘を眺めている。この日は、姫路領かつ船付で賑わっている高砂に泊まり、翌朝一番、高砂社の「相生の松」を見物し、生石社の巨石、そして曾根の天満宮の「曾根の松」を見ている。

「播州は実に松の名所なり。名ある松は云に及ばず。そのほか松林之奇麗、誠に海浜ゆえ、別して面白し」(『塵壺』)

松は長岡藩において最も大切にされた樹木であつた。長岡城内外は松がいたる所に植えられていた。藩は四木制度を定め、家臣の屋敷内に松・杉・桐の樹を植えることを義務付けていたが、とりわけ城近辺には松が多かつた。城近く継之助の長町の屋敷にも「蒼龍」と号の由来を取るような松があつた訳である。

お盆の七月十三日は、姫路城下付近の宿場町、正條で過（と）した。少し故郷の越後を思つて感傷的なつたらしく、磁石を使用して、故郷越後のある北の方角をさがし、次のような歌を詠んだとある。

「ふるさとのこし地ハ遠はりま山すめる月こそかわらさらまし」(『塵壺』)

宿から今見ている月も、故郷に今照つている月も変わらないが、ふるさとの越後は遠いという。さながら、同じ形の月を介して故郷をしのぶ感傷は、奈良時代の文人・唐の玄宗皇帝に仕えた阿倍仲麻呂が、中国の地から祖国日本を思うようでもある。

さて面白いのは、正條から突然脇道にそれて赤穂に向かつていることであろう。わざわざ遠回りをしてまで、赤穂を訪問したところをみると、長年おもしろい密かな宿願であつたらしい。というのも河井の父、代右衛門秋紀は、茶の湯宗（そう）偏流（へんりゅう）の師範役をしていた。宗偏流は実は、赤穂浪士と関係がある。この流派をはじめた山田宗偏は、江戸では近所に吉良邸があつた。吉良上野家とは旧知の間柄であつた。そのため赤穂浪士の一人、大高源吾が身分を隠して宗偏流に入門し、吉良邸での茶会の情報を得て、吉良の在宅を確信し、十二月十四日に討入りを決めたとの逸話がある。継之助は、この機会に歴史の舞台を訪ねてみたかつたのであろう。

※参考文献 決定版 河井継之助 稲川明雄著 (高柳)

長岡城奪還 — その成功の影に ● パネル紹介



長岡城奪還の解説パネル

慶応四年（一八六八）五月十九日早朝、長岡城は、増水した信濃川を強行渡河し急襲した西軍によって落城。それから二ヶ月、長岡藩兵は各地で戦いを続け、そして長岡城奪還の命運を決める八丁沖（八丁沖）渡河作戦を執行する。このパネルには奪還戦における戦略が表されている。

八丁沖は、城下の北東に位置し、南北約五キロ、東西約三キロに及び、魔物が棲むと恐れられていた沼地だった。七月二十四日夜半、長岡藩兵六百九十余名は八丁沖を潜行し、翌日早朝上陸。西軍の前線基地を襲撃すると、城を目指して進撃した。一方、不意をつかれた西軍は防戦しきれず敗走する。その結果、長岡藩士は一度落城した城を取り戻すことに成功した。パネルにはこの奪還戦の東西両軍の防衛線や攻撃、退却の路などが記されている。また、上陸後長岡藩兵が

分かれて進攻した道筋などは、色分けされた矢印で表されている。さらに、この奪還戦が日本の近代戦史上、特筆できるものといえるとして説明もある。以下に概要を挙げてみよう。約二万名の西軍に対して長岡・会津・米沢藩などの東軍は約八千名。人数の上では絶対的不利の中、長岡藩兵は七百名

足らずで城下に突入するという奇襲作戦を、河井継之助の指揮のもと用意周到に準備する。また、出陣前に継之助は、藩兵に口上書を読み聞かせ「なぜ城を奪還するのかわ」を説いたという。藩兵一人ひとりに役割を与え、結果を出させるという継之助の際立った采配によって奪還は成功した。しかしながら、上陸後の戦闘で継之助が負傷したことにより、長岡藩兵の士気は衰え、再度落城してしまう。パネルでは、「この奪還戦は、城下の町民らの盆踊りなどで歓迎され、その後の長岡の歴史に大きな勇気を与え続けている」と結んでいる。

現在、八丁沖は田園風景が広がっており、昨年度から友の会主催でこの歴史的に重要な場所を歩く「八丁沖ウォーク」を開催している。

※参考文献「決定版 河井継之助」 稲川明雄著 (神保)

第二回 八丁沖ウォーク

十月八日、第二回八丁沖ウォークを開催した。県内外から参加された約百名が、昨春オープンした大黒町の北越戊辰戦争伝承館に集合。今回、「奪還戦の前に餅を渡した」という逸話にちなみ、全員に資料と共に餅を配った。開会式の後、陣羽織を羽織った当館友の会理事の星さんらによる勇ましい掛け声を合図に出発。所々で行われる奪還戦の解説や、新組コミュニティセンターの協力による狼煙の演出など、参加者から「往時に思いを馳せることができた」との声が聞かれた。さわやかな秋風に吹かれながら、上陸の地・富島まで歩ききった後、皆で力強く勝どきをあげた。

(神保)



第二回 八丁沖ウォーク



第二回 八丁沖ウォーク

● 八丁沖ウォークに参加して

先ず戊辰戦争伝承館の二階から、八丁沖の古戦場を眺めた。今は美田が広がり、ここが激戦の地であったとは想像もつかない。食糧の餅を持ち、五間梯子を肩に（梯子を模した物）「エイイイオ」の掛け声も勇ましく、平成の長岡藩約百名が出発。要所々々で激戦の様子を聞きながら、富島古戦場八丁沖までの約五キロを歩いた。今年も継之助没後二四五年とのこと、この戦はそう遠い昔の事ではないのだと歩きながらしみじみと思った。

— 竹内光子 (長岡市)

● 八丁沖に先人を感じる

おかげ様で念願かない八丁沖渡河作戦の地を歩く事ができました。好天に恵まれ先生方のご説明を受けながら今では山河を望む美田風景となった古の戊辰の地を歩き、暗闇では曾々祖父らが見る事は無かったであろう城下（長岡駅）に至る美しい風景を遠望し感慨深いものでした。はじご橋他随所に先生や星さんの解説を聞き、継之助さんに率いられた奪還戦を戦った長岡藩士の決死の姿を偲ぶ事ができ、今在る幸福を思いました。

— 梅田雅文 (愛知県半田市)

● 古戦場の住人として歩く

この度の八丁沖ウォークの出発地点は、新組地区の「北越戊辰戦争伝承館」でした。同地区は北越戦争の激戦地であり、長岡郷土史に深い意義を記す土地です。私自身は「峠」を読んで以来、河井継之助を誇りと思っております。しかし同時に、戦場となった故郷の農民がどれだけ苦しんだのかも知る事になりました。それらの事実を胸に置きながら、今は美田に姿を変えた八丁沖を歩くと、歴史と自身がひと連なりである事が心身に迫ります。先人たちの苦難と比べるべくもなく、二時間足らずで横断は成功しましたが、そのまま歩き続けて城跡に建造されたアオーレ長岡に旗を立てたい衝動に駆られました。— 恩田富太 (長岡市)

● 第二回八丁沖ウォークに参加して
 昨年は予定が合わず参加できなかったのですが今年こそはと思っていただけに案内が届き、歴史好きの友人二人と十日町市から参加しました。当日は天気にも恵まれ、さほど暑くない中で八丁沖ウォークとなり、チェックポイントでの激戦地の説明は「のろし」の効果で非常にわかり易かったです。東軍に気づかれないようにする「八丁沖渡河作戦中」でしたが、参加した他の方々ともう少しお話できればよかったですと思います。また百名あまりの参加者とのことでしたが、四十代の我々が親子連れの方々を除くと若いグループであり、もっと若い世代が地元元々の歴史に興味を持ち、こういったイベントに参加して欲しいと思えました。新組地区の皆様、友の会事務局の皆様、大変お世話になりました。— 村竹光生 (十日町市)

交流研修旅行

十月十三日・十四日第六回友の会交流研修旅行「只見・東軍殉難者慰霊と会津若松・新島八重史跡探訪の旅」が催されました。総勢十八名研修旅行初の泊二日の旅でした。

十三日は医王寺において戊辰役東軍殉難者慰霊祭が只見の方々や関東からの方々と交えしめやかに営まれました。その後只見の河井継之助記念館で当館館長による講演があり数名の方からの質疑応答で盛り上がり、有意義な一日目が終了。「季の里・湯ら里」で懇親会と温泉に浸かり各自明日への体力温存?とならなかつた方もいらしたようですが。

翌十四日は「新島八重歴史探訪」に会津若松へと向かい、風情



「季の里・湯ら里」の前で



↑阿弥陀寺境内にて
←法界寺にて中野竹子墓参

ある七日町を散策、若松城の小天守にあたる「御三階」を移築された阿弥陀寺では戊辰戦争で亡くなられた御霊に手を合わせた後、現在は個人宅の脇に石碑が建っている八重の生家跡を訪ねました。そして八重のライバルと云われた中野竹子の墓がある会津坂下の法界寺に行き墓前に線香を手向、また御住職より竹子にまつわる話を伺い当時は偲び胸が詰まる思いがしました。

今回の旅行では各所で会津魂に触れ深い感銘を胸に、会津を後にしました。長岡を出発する時は雨が降っていましたが、会津では傘をさすことも無く参加者の方々のご協力で無事に帰る事が出来ました。皆さん本当に有難うございました。

(伊佐)

●第六回研修旅行に参加させて戴いて

十月十三日只見町に於いて、第二十回戊辰役東軍殉難者慰霊祭が厳かにとり行われました。私には初めての経験でしたが、旧長岡藩士の継之助のために、只見町の方々による墓の保存、記念館の維持、更には広報活動には肝銘を受けました。それだけに、継之助の「生き様」について、地域を越えて多くの方々に譲らられていることも改めて知ることになりました。翌十四日の会津訪問も好天気に恵まれ、私は良い勉強の機会となりました。尚、今回の研修旅行で新入の私に参加の皆様から暖かいお心遣いを戴きましたこと、紙面をお借りしてお礼を申し上げます。 — 早井信英(新発田市)

●一泊研修旅行に参加して

記念館開館以来初の一泊研修旅行は、実に楽しかった。車内での内山住職のご指導による読経の練習は、わかりやすいお話に車内はなごみ楽しく練習することが出来、慰霊祭で無事読経することが出来安堵した。また、夜の合同懇親会もなごやかで楽しいものであった。ただ、折角の湯にのんびり入る時間が少なく残念でした。法界寺内に展示されている新島八重のライバルと云われた中野竹子の遺書の素晴らしさには圧倒された。今後また、このような一泊旅行が企画されたら是非とも参加したいものと思っています。ありがとうございます。 — 木内清一(長岡市)

会員の声

「会員の声」大募集!

●大河ドラマ「八重の桜」と河井継之助

週刊誌にNHK大河ドラマ「八重の桜」の特集記事があり、河井継之助とガトリング砲が掲載されていた。黒船来航以来、日本は揺れていた。各藩は欧米の日本侵攻に備えて洋式の軍備増強を進めてきた。河井継之助は薩摩藩、長州藩に先駆けて、日本で初めてガトリング砲を二門購入した。一方で「武装中立」を進める中で何の為に備えてあったのか。ガトリング砲は北越戊辰戦争で初めて火を噴いたが、河井継之助の胸中にはいかに興味深い。

●ガイドボランティアに感謝

高校時代、長岡で過ごしました。「燃えよ剣」「峠」が愛読書です。只

●歴史と私

子どもの頃から歴史が大好きで、大学も史学科に進学しました。卒業後、教員になりました。中学生に歴史を教えてきました。退職

●星野明義(埼玉県加須市)

見町の記念館で友の会を知りました。三年前に埼玉県警察の小さな警察署長を最後に退職し、尊敬する河井継之助の足跡と自分を振り返る意味から入会いたしました。昨年十月、貴館ガイドボランティアの南波さんに案内をいただき、小説では出てこない生のエピソードを聞き感激をした次第です。関連の会合等での再会を楽しみにしています。

●黒黒 信(埼玉県川口市)

「会員の声」大募集!

原稿は二百字以内(題名、氏名は字数外)、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしております。

お知らせ

平成25年度 総会・講演会・懇親会のご案内

日時: 4月27日(土)午後1時30分から
会場: 会館青善 参加申し込みが必要です。

- ・第1部: 総会 午後1時30分~1時55分
 - ・第2部: 講演会(定員先着150名) 午後2時~3時30分
 - ・第3部: 懇親会 午後4時~
- *詳細はご案内をご覧ください

●各種講座実施中! お気軽にお問合せください!



●記念館オリジナルポストカード販売中!
(5枚組、パッケージ付300円)郵送も承ります。

開館6周年記念講演会「八重の実像」開催

霊山歴史館学芸課長 木村幸比古氏

十二月二十二日、雪がちらつく中行われた今回の開館記念講演会。講師にお招きした木村幸比古氏は、「八重の実像」と題し、二十五年度のNHK大河ドラマ『八重の桜』の主人公、新島八重について講演。まだ放送前ということでも八重についての期待も高く、会場には五〇〇名を超える聴講者が訪れた。

幕末維新研究の第一人者である木村氏の講演は、新島八重だけにとどまらず幕末の歴史について多岐にわたった。司馬遼太郎氏が「会津藩というのは封建時代の日本人がつくりあげた藩というも

の中での最高の傑作のように思える」と残したことを紹介。砲術家の家に生まれた八重の兄山本覚馬が、ありとあらゆる武術、医学や舎密などにも通じていたこと。また会津の精神について触れた。「什の掟」と「家訓」がそれ

にあたる。その中の「ならぬものはならぬ」「徳川のためには一身を尽せ」という会津の家訓は、幕末のジヤンヌ・ダルクと呼ばれる新島八重の存在、精神につながっていく。

主君のため、弟のためにと断髪、男装し銃を持ち戦った八重。その性格は好奇心の塊で、銃弾を解体し研究するなど、のちに夫となる新島襄には「その精神と気持ちハンサムだ」と言わしめた。また、西軍の打った弾の数をこと細かく記録していた几帳面さや、その体格から十三歳のときに米俵四俵を四回持ち上げたこと。そういった

逸話での木村氏のみせる軽妙洒脱な語り口は、会場に大きな笑いを誘った。

そして兄山本覚馬が竜馬暗殺のときに京都を訪れ、新選組と接触していたこと。八重の断髪を手伝った高木時尾という娘が、後に新選組隊士だった斉藤一と結婚した事実などには驚き聴き入る会場であった。

戊辰戦争の後、夫新島襄を支え、ともに同志社大学創立に尽力した八重。同志が集まってひとつになろうという考えのもと創られたのが同志社大学なのだという。また「慶喜は決してこの戦いが間違

逸話での木村氏のみせる軽妙洒脱な語り口は、会場に大きな笑いを誘った。

そして兄山本覚馬が竜馬暗殺のときに京都を訪れ、新選組と接触していたこと。八重の断髪を手伝った高木時尾という娘が、後に新選組隊士だった斉藤一と結婚した事実などには驚き聴き入る会場であった。

戊辰戦争の後、夫新島襄を支え、ともに同志社大学創立に尽力した八重。同志が集まってひとつになろうという考えのもと創られたのが同志社大学なのだという。また「慶喜は決してこの戦いが間違



霊山歴史館学芸課長・木村幸比古氏を招いて開催された開館6周年記念講演会

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数/正会員：539名/協賛会員：53名(2/28現在) **会員募集中**

●特典/①友の会会報「峠」配付
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

●入会手続き
①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで
①正会員/小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円
②協賛会員/一口5千円(法人の他、個人でも可)

●口座について
・加入者名/ 河井継之助記念館友の会
・口座番号/
郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫本店営業部 普1032829
北越銀行本店 普1764663
大光銀行本店 普3011256
第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●友の会事務局/河井継之助記念館
友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

新入会員ご紹介

(平成24年11月1日~平成25年2月28日現在)

加藤 昇 新潟県長岡市 齊藤 真吾 神奈川県横浜市 原 緑 新潟県長岡市
木戸 貞男 新潟県長岡市 田中 健一 新潟県長岡市 以上7名(アイエオ順・敬称略)
栗林 弘一 新潟県長岡市 長谷川清司 新潟県長岡市

編集後記

●色の少ない冬から春に季節が変わった途端、目に映る景色も鮮やかさを増し私たちの暮らしの中に飛び込んできます。なかでも花は身近に色を添えてくれる物のひとつです。春の花には黄色が多いといいますが、紅、ピンク、紫など色とりどりの花の中でも一際目を惹きます。記念館の庭でもカタバミが春から秋にかけて黄色の花をつけます。河井家の家紋でもあるカタバミは小さくとても愛らしい花です。その姿に似合わず雑草と呼ばれるのは、強い日差しや風雨にも負けずしっかりと根を張って咲く逞しさからでしょうか。雪解けも進み春も間近です。春を心待ちにしていた草花も、庭のあちらこちらでまた可愛らしい姿を見せてくれることでしょう。



カタバミ

編集人・稲川明雄 高柳吟音 布川博子
会報委員・猪俣春美 神保智子 西川里美
猪本爾ハ 瀧澤 学 松山賢二
渡邊静江
構成・月刊マイスキップ編集部
印刷・高遠印刷株式会社